

第4章 「半農半X」のコーディネーターに学ぶ

塩見直紀氏

(NPO法人里山ねっと・あやべ、半農半X研究所代表)

1. コーディネーターのプロフィール

塩見氏は、1965年京都府綾部市に生まれ、故郷で育った。大学卒業後、通販会社に勤務している中で、作家・翻訳家である星川淳氏の「半農半著」という言葉に出会い、触発され、「私にとって“著”にあたるものは何か?」と問うなかで、誰もが必ず有する可能性や長所を「X」で表現する「半農半X」というコンセプトが生まれた。

1999年、33歳を機に退社し故郷にUターン、半農半Xの実践をはじめた。現在、小さな自給農のかたわら、持続可能な小さな暮らしをベースに、天与の才を活かした仕事を行う「半農半X」というライフスタイルを提唱している。また2000年より「里山ねっと・あやべ」のスタッフとして、綾部の可能性や21世紀の生き方、暮らし方としての「里山的生活」を市内外に向けて発信している。

2. 手がけてきたコーディネーターとしての取り組み

塩見氏は、都市と農山村の交流を促す活動に取り組んで来られた、いわば交流型のコーディネーターであると言える。なお、塩見氏がコーディネートしてきた主な仕事は以下の二つが挙げられる。

(1) NPO法人里山ねっと・あやべでの取り組み

塩見氏は、1999年、33歳のときに故郷・綾部市にUターンしてきたが、ちょうどその年の3月に、塩見氏の母校である旧豊里西小学校が閉校になった。同年、綾部市が市民企画を公募（翌年が市制施行50周年）し、その応募企画事業の一つとして、小学校の跡地を利用して都市と農村の交流、定住支援などをおこなう公設民営組織「里山ねっと・あやべ」が翌年7月に発足した。塩見氏は、組織の立ち上げから中心的メンバーとして関わり、「里山塾」「農家民泊」「里山ネイチャーツアー in あやべ」「米作り塾」等、農業体験、酪農体験や豆腐手作り体験等を通じた、都市と農村の交流促進、さらには移住の促進に取り組んでいる。また、ホームページの開設、地元通信、メールマガジンの配信、「田舎暮らし情報センター」の開設等を通じた情報発信にも積極的に取り組んできた。現在は、非常勤スタッフとして、情報発信や綾部里山交流大学等の企画運営を担当している。

こうした塩見氏と仲間達の取り組みにより、交流人口は下表に示すように、着実に増加しており、里山ねっと・あやべの取り組みの広がりや深まりが見て取れる。

■年度別イベント参加者数（人）

H12年度	H13年度	H14年度	H15年度	H16年度	H17年度	H18年度	H19年度	H20年度
655	816	1,134	1,178	1,333	1,683	1,997	2,278	2,416

■年度別宿泊者数（人）

H18年度	H19年度	H20年度
701	1,571	1,814

※廃校の教室の一部を宿泊施設として、イベント参加者、観光客等の宿泊を受け入れている。

■空き家紹介等状況

	H10年度	H11年度	H12年度	H13年度	H14年度	H15年度	H16年度
登録物件数（戸）	9	12	-	13	11	10	8
希望者（人）	59	21	-	30	85	70	38
交渉成立（戸）	5	1	-	4	0	7	1
	H17年度	H18年度	H19年度	H20年度			
登録物件数（戸）	8	8	11	18			
希望者（人）	21	38	64	21			
交渉成立（戸）	1	2	6	1			

（２）半農半X研究所での取り組み

通販会社に勤務していた頃、作家・翻訳家である星川淳氏の「半農半著」という言葉に出会い、触発され、「私にとって“著”にあたるものは何か?」と問うなかで、1995年、誰もが必ず有する可能性や長所を「X」で表現する「半農半X」というコンセプトが生まれた。

1999年、33歳を機に退社し故郷にUターン、半農半Xの実践をはじめた。2000年には、半農半X研究所を設立し、ホームページ開設、『ボランティアコミュニティ』出版（農文協）等精力的な情報発信活動を開始した。その後も、『半農半Xという生き方』（ソニー・マガジンズ）、『綾部発 半農半Xな人生の歩き方88』（遊タイム出版）、『半農半Xの種を播く』（コモンズ）等多数の著書を発刊。また、綾部での「半農半Xデザインスクール」、東京での「半農半Xカレッジ東京」等、ワークショップや講演を行い、持続可能な小さな暮らしをベースに、天与の才を活かした仕事を行う「半農半X」というライフスタイルを提唱している。

なお、綾部市への移住を希望する家族が最近増えているとのことであるが、塩見氏が「半農半Xを通じて移住を希望している人が300家族、里山ねっと関係で300家族、市長の関わりで300家族といった具合で、綾部への移住を希望している人は1000家族はいるのではないか」と言うように、塩見氏の半農半Xをテーマにした活動による貢献は非常に大きいと言える。

3. これまでの取組みにおけるコーディネーターとしての工夫

(1) 『良い人』と『良いメッセージ』

塩見氏は、交流事業のコーディネーターとして沢山の事業を企画・運営してこられた経験を踏まえて、「どれだけの交流を生み出せるかは、いかに『良い人』を呼んでくるかにかかっていると思う。『良いメッセージ』を送れば、『良い人』が集まってくる。良いメッセージというのは、自分たちの活動のコンセプトや目標像。良い人とは、それを理解してくれる先達やリーダー、仲間である。」と語る。

「良いメッセージ」とは、綾部市の場合、「半農半X」や「田舎暮らし」といったコンセプトワードがそれにあたるだろう。実際に、こういったコンセプトに惹かれて来てくれた人とは、初めて会った人でも、「来た瞬間に長い間友達だったような感覚になるときがある」とのことだ。

一方で、農家民泊をテーマにしたテレビ番組で、綾部の農家民泊が紹介されたことがあるそうだが、「放映されると電話がジャンジャン掛かってきて、沢山泊まりに来た。だけど、本当に来てもらいたい人には来てもらえなかった。暇だから、安いからでも来てもらっても困る。価値観を共有できない人が来てくれても、地域住民が疲れるだけである。来て欲しい人が茶の間にはいないことがよくわかった。」という苦い経験もされているそうである。

なお、良いメッセージ、良いコンセプトを生み出す秘訣としては、「日ごろから言葉に敏感である必要がある。吊革広告からでも良いコンセプトは見つけることができる。言葉を磨くと企画書も良いものを書ける。キラリと光る言葉・表現を使うことを心がけると良い」と言う。さらに、「感性と言葉は繋がっている。自分がハッとした言葉、感性に響いた言葉をメモしておくの良いだろう。感性に響く言葉は、都会の人の言葉かもしれないし、おばあちゃんの言葉かもしれない」と語りながら、携帯電話のメモ帳に記録された広告のキャッチコピーや、雑誌の一文などの数々を見せてくださった。塩見氏は、今も、良いコンセプトを生み出す営みを続けている。

(2) スタッフや地域住民の「X (エックス)」を見つけ、活かす。

里山ねっと・あやべの活動の特徴の一つとして、「パン焼き体験教室」「里山そば塾」「米作り塾」等数多くのバラエティに富んだ講座やプロジェクトを有することだが、それを切り盛りするのは大変なのではないだろうか。それらの活動をどのようにコーディネートしているのだろうか。

塩見氏にその秘訣を聞いてみた。「何かを寝食を忘れてやれる人が中心にいることが重要だろう。例えば、パンづくりのイベントなら、寝食を忘れてパンづくりにのめりこめる人がいること。また、イベントのテーマについて、都会から来る人に負けないだけの知識や技術を持っている必要があるが、寝食を忘れてできる人ならそれだけのものを持っているだろう」とのこと。まさに、スタッフや地域住民の天与の才「X (エックス)」を見つけ、活かすことが重要なのだと。ここでも、「半農半X」は威力を発揮している。

ちなみに、塩見氏は、里山ねっと・あやべを立ち上げた当初から、「100のクラブが出来たら良いなあ」と思っていたと言う。「里山わんこクラブ」(犬好きが集まって里山を散

歩)、「里山囲碁クラブ」など、地元の人や綾部に来る人が自分な好きなことを、人を募って、自然発生的にやる流れができないだろうか。塩見氏の夢は一步一步実現に近づいているようである。

(3) 地域の「X (エックス)」を見つけ、活かす。

塩見氏の話の聞いていると、塩見氏は、綾部市という地域「X (エックス)」までも見つけ、活かそうとされているように感じた。

実は、綾部市は、都市農山村交流の分野に限っても、近隣に沢山の有名な地域、先進地域がある。例えば茅葺き集落や芦生原生林のある美山町や、地球デザインスクールのある京丹後市などである。そうした中、綾部市はどのような路線で進めば良いのだろうか。どのような路線で行けば都市住民に綾部市を選んでもらえるのだろうか。

塩見氏は語る、「美山町の自然と戦っても勝てない。地球デザインスクールのエコテクノロジーと戦っても勝てない。なので、綾部の特徴である精神性を活かすことが重要だと考えた。綾部市はゲンゼ(郡是)の発祥の地。ゲンゼは、創業者は『国には国是があるように、郡には郡是が、村には村是が必要だ』と言う信念に基づいて社名にした。村人は蚕を飼って、株主にもなった。ゲンゼは、女工さんも大切にされた。製糸会社の女工と言うと、女工哀史のイメージにもあるように一般的には悲惨な待遇だったが、ゲンゼの女工さんは職場に行くというよりは学校に行く感覚で働いていた。社員教育にも熱心だった。だから、ゲンゼの女工さんは嫁さんとしても引っ張りだこだったらしい。こうした博愛の精神性を地域づくりにも活かしていきたい」と。塩見氏は、綾部市の「X (エックス)」を「精神性」と位置づけて地域づくりを進めるべきだと考えたわけだ。

塩見氏はさらに徹底している。美山町などと異なる路線で地域づくりを進めるなら、その評価指標も違ってしかるべきだと考えた。「人」(交流人口数)や「円」(経済効果)等に代わる指標を綾部は掲げようとしているのだ。

塩見氏はこう語る、「上勝町に売り上げでは勝てない。美山町に交流人口では勝てない。綾部は、綾部で生まれる『物語数』で勝負したいと思っている。一万の物語を生み出したと思っている。交流の中から生まれる物語を。例えば、村のおじいちゃんが、イベントに参加した町の人に名刺を初めて作ってもらった。人生で初めての名刺を作ってもらったと喜んでた。例えば、味噌作りのイベントに参加した神戸のデザイン会社の社長さんが、イベントのポスターをプロの技を使って作ってくれた。とても喜んでた。こうした物語を沢山作ってほしい。」と。

地域の「X (エックス)」を見つけ、さらにその「X」を正しく評価するための指標を設定する。そうするとその地域はどんどん輝いていくのだろう。

(4) 今地域に足りないのは、デザイン力だ。

さて、塩見氏は、講演活動などで全国各地を訪問し、色んな地域づくりの取り組みを見ておられる。そうした塩見氏が、全国の地域づくりの活動に足りないものは何だと感じておられるのか聞いてみた。塩見氏は即座に「デザイン力だ」と答えられた。

塩見氏は「地域間で『デザイン格差』が起きているのを感じている。馬路村にしても、結城登美雄さんにしても、地域づくりが上手くいっている地域や地域づくりの達人はデザ

インにこだわっている。一方で、頑張っているのに、デザインが悪いために人が集まらない地域が少なくない。今は情報過多の時代で、情報が氾濫している中では、デザインが良くなければ、人の目を引けない。デザインがよければ、チラシを手にとってもらえる。まずは見てもらえるものを作る必要がある。」と言う。さらに、「いつの時代も若い人は旅が好き。若い人に来てもらうためにも、彼らの感性に訴えかけるものをつくる必要がある。彼らは、自分が関心を持ったたった一つのことのためにでも、遠くに来てくれる。だからこそ、綾部にデザイナーを誘致したいと思っている。デザインで解決できることがある。」と続ける。

4. コーディネーターとして学ぶべき点

綾部市は、田舎暮らし、農山村交流の分野では近年では有名な地域の一つになっているが、昔からそうだったわけではなく、前述のように里山ねっと・あやべの貢献が大きいと思われる。今では、「石窯パン焼き体験」「里山そば塾」「米作り塾」「里山交流大学」などのイベント参加者数は約2400人（平成20年度）、廃校を利用した宿泊施設への宿泊者数は約1800人（平成20年度）、その他、市内の空き家のIターン希望者等への紹介も数十戸等、大きな実績を残しているが、活動を始めた当初は、交流人口にしても、宿泊者数にしても500人程度だったのを、年々着実に上積みして今に至っているのである。

里山ねっと・あやべのスタッフ・朝倉氏に、これだけの人を集めることができた魅力は何かと聞いたところ、綾部の田園風景など地域の魅力ももちろんあるけど、「『半農半X』というコンセプトを発明したことではないでしょうか。」とおっしゃっていた。半農半Xの本を読んで、里山ねっとのイベントに参加される方が非常に多いのだそうだ。

『半農半X』。塩見さんが1995年頃に生み出したコンセプト。それから約15年もの間、このたった4文字の言葉を磨きに磨いて来られた。確かに面白い言葉ではあるけど、扱い方によってはすぐに忘れ去られたり、使い古されたりしていたかもしれない。それをある種の執念をもってこだわってこられたからこそ、果実を生み出す源泉になったのだろう。

コーディネーターとは何だろうか。巷では、プロジェクトに関わる人・物・金をうまくマネジメントする人というイメージが色濃いが、そのマネジメントは、ヒトを管理する方向（ベクトル）ではなく、解き放つ方向であるべきだという基本的なことを、今回のヒアリングを通して強く感じさせられた。

誰も、細かい指示の元にビクビクしながら活動することは好きではない。スタッフ一人一人が寝食を忘れてできる自分の得意なことに没頭できる環境を与えられ、そういった一人一人の「X（エックス）」の営みが集合して、一つの事業や活動が好ましい形で進んでいけば、こんなに素敵なお仕事はないだろう。塩見氏は、そんなコーディネーターの理想のあり方の一つのモデルを提示している。

【参考文献】

- NPO法人里山ねっと・あやべ 実績紹介資料
- 塩見直紀ホームページ <http://www.towanoe.jp/xseed/>
- 「半農半Xという生き方」（塩見直紀著、ソニー・マガジズ）